

信綱生誕百五十年 田中拓也

一八七二年六月三日に三重県鈴鹿郡石薬師村で佐佐木信綱が生まれてから百五十年の歳月が過ぎた。同年生まれの作家には田山花袋、樋口一葉、島崎藤村等がいる。一九六三年十二月二日に亡くなるまで信綱は数多くの業績を残したが、私たちに関連する最も身近なものは「心の花」の創刊と言えるだろう。

私の手元に『佐佐木信綱文集』（竹柏会）という一冊がある。一九五六年に既発表の歌論や随筆等をまとめた一冊で、古書店等でも二千円前後で入手できる。その中に信綱が選暦を迎えた頃に記した「廣く、深く、おのがじしに」という一文があるので、紹介したい。（一部、字体を改めている）

自分が竹柏會を興した明治中期の頃の歌は、題材はきはめて狭く、内容も浅く、かつ限られたものであった。それを改革する意味で、自分は「廣く、深く、おのがじしに」といふことを、斯の道の標語にしたのであった。

「おのがじしに」とは、個性の動くままにといふほどの意である。一つの主義主張で拘束し、統一しようとするのではなく、作者各々その得る所に従つて進むべきであると思ふ。（中略）

自分は、現在及び将来の歌壇に向つても、等しく「おのがじしに」といひたいと思ふ。口語歌、定型を破つた歌、新しい思

想的短歌、新芸術派短歌など、それぞれに存在してよいのである。作者は素質と環境との違ひによつて、さまざまな個性を持つてゐる。それを強ひて一樣にすべきでなく、又しようとする、個性は没却され、真の詩心の芽は枯らされてしまふ。自分はいくまでも、「おのがじしに」といふことを信ずる。

私はこの中の「作者は素質と環境との違ひによつて、さまざまな個性を持つてゐる。」という一文に強く共感する。人にはそれぞれの氣質があり、それぞれの人生がある。短歌という詩型との関わり方も千差万別である。「心の花」という場が長く続いている一番の理由もそこにあるのだろう。だが、信綱は「おのがじしに」の前に「廣く、深く」と記している点を忘れてはならないと思う。同文の後半には次のような記述がある。

今一つ「深く」といふこと。今の自分は、第一にこのことを考へて居る。いかに個性の現れであつても、いかに題材は廣くても、その歌に深みが乏しければ、人心を動かすことは出来ぬ。

私はここに信綱の「凄み」を感じる。信綱の理念は単なる「個性」重視なのではない。「廣く、深く、おのがじしに」なのである。そこには、作品に対する厳しい眼差しがある。信綱生誕百五十年を機に、信綱を歴史上の人物として仰ぎみるのではなく、私たちと繋がる一人の「歌人」として、改めてその言葉の意味を噛み締めてみたい。